

「桜門体育学研究」投稿の手引き

平成 20 年 6 月 2 日制定

平成 28 年 6 月 11 日改訂

桜門体育学会編集委員会

目次

1. 投稿資格
2. 原稿種類など
3. 執筆に際する注意
4. 提出原稿の構成
5. 本文の体裁
6. 本文中での文献引用の仕方
7. 文献リストの執筆要領
8. 謝辞・付記

付録 1. 表紙ページの記入例

付録 2. 本文の書式例

付録 3. 4. 抄録(和文・欧文)の書式例

1. 投稿資格

本誌に投稿できる者は桜門体育学会員(筆頭者)とする。ただし、編集委員会(以下、本委員会と称する)が認めた場合はこの限りでない。

2. 原稿種類など

1)本誌に掲載される原稿の種類は、「総説」、「原著論文」、「実践報告」、「研究資料」、「卒論紹介」のいずれかで、それぞれの特徴は以下の通りである。

①総説

体育・スポーツ科学における一定範囲の研究視座について、文献総覧を中心に、当該研究視座の体系を考察した学術論文。

②原著論文

スポーツ実践や関連事象について、事例を直視した分析あるいは実験や各種調査による仮説検証などによって、新規性と普遍性の高い原理や原則を明らかにし、体育・スポ

ーツ科学の発展に寄与した完成度の高い学術論文。

③実践報告

スポーツ実践や関連事象について有益な知見を導き出そうとする研究視座から、事例を直視した分析によって、スポーツ実践または体育・スポーツ科学にとって有意義な成果を修めた学術論文。

④研究資料

スポーツ実践や関連事象について有益な知見を導き出そうとする研究視座から、実験や各種調査による仮説検証などによって、スポーツ実践または体育・スポーツ科学にとって有意義な成果を修めた論文、または海外論文の翻訳紹介などの資料性の高い論文。

⑤卒論紹介

卒業論文の要旨を簡潔にまとめた論文。

2)原則として、上記①②③は、1編につき刷り上がり12頁以内、また④は、1編につき刷り上がり8頁以内、⑤は1編につき刷り上がり4頁以内とする。なお、1ページに掲載できる文字数は最大約1600文字であり、図(写真を含む)表はその大きさから文字数を推定すること(例えば、「1ページの4分の1程度の大きさであれば400文字相当」など)。

3)委員会の判断により、上記の論文種別の他、学会大会の報告などを掲載する場合は、この際の手書式などは委員会が定める。

3. 執筆に際する注意

人権擁護および動物愛護についての配慮

被験者や被験動物の取り扱いについては、人権擁護および動物愛護の立場から、十分に配慮するとともに、実際に配慮した点を論文中に明記する。

4. 提出原稿の構成

1)用紙および提出部数

原稿は、ワードプロセッサで作成し、A4判縦置き横書き、全角40字20行(欧文綴りおよび数値は半角)で、上下左右に2-3cmの余白をとる。頁番号を下中央に記入し、行番号も入れる。フォントの大きさは10.5ポイントとする。

原稿(図表、写真を含む)は、電子ファイル(Wordファイルなど)にして、電子メールにて学会編集委員会(E-mail: omonhensyu@nu-taiiku.jp)に送付する。

2)表紙

原稿の表紙(1枚目)には下記の事項を記入する。②③④⑤については和文と欧文の両方を記入する。「付録1. 表紙ページの記入例」に従って、以下の番号に対応したすべてを記載すること。

①原稿の種類

②題目

③著者名

④所属機関名

⑤キーワード(タイトルに含まれない用語3語・5語)

⑥連絡先(住所、電話番号、電子メールアドレスなど)

⑦審査を希望する研究領域の番号(下記表1より第2希望まで可)

表 1

00	体育哲学	01	体育史	02	体育社会学	03	体育心理学	04	運動生理学
05	バイオメカニクス	06	体育経営管理	07	発育発達	08	測定評価	09	体育方法
10	保健	11	体育科教育学	12	スポーツ人類学	13	アダブテッド・スポーツ科学	14	介護福祉・健康づくり

(1)原稿の種類

原稿の種類は、2-1)を参照すること。

(2)題目

題目は、和欧文ともに研究の内容を的確に表現しうるものであること。副題をつける場合には、コロン(:)を用い、主題に続ける。主題、副題ともに、英文タイトルの最初の単語は、品詞の種類にかかわらず第1文字を大文字にし、その他は、固有名詞など、特に必要な場合以外はすべて小文字とする。

なお、短報については、基となった学会大会の研究報告の題目を定める範囲で修正した場合、原題を題目の下部に付記すること。

(3)所属機関名

筆頭著者と共著者ともに、和文と欧文とも正式名称を記入する。大学の場合は学部名を、大学院の場合には研究科名、公官庁や民間団体の場合は部課名まで記入する。

(4)キーワード

キーワードは、論文の内容や特色を的確に示し、検索に役立ち得るものとする。題目はそのまま検索の対象になるので、題目に含まれていないものをキーワードとして記入すること。和文と欧文とも3語-5語を記載する。本文が和文の場合、和文キーワードは本文の前、欧文キーワードは欧文抄録の末に記載する。本文が欧文の場合、欧文キーワードは本文の前、和文キーワードは和文抄録の末に記載する。

(5)連絡先

連絡先は、査読過程での諸連絡に用いる。緊急の際に確実に連絡することができる連絡先(住所、電話番号、電子メールアドレスなど)を記入する。

3)抄録

「総説」「原著論文」「実践報告」には抄録を付ける。本文が和文の場合は200語程度(ただし1語はおよそ5音節)の欧文抄録、本文が欧文の場合は300-400字程度の和文抄録とする。なお、欧文抄録には査読用に和訳を添える。この抄録には、原則として研究の目的、方法、結果、および結論などを簡明に記述すること。

(1)欧文抄録については、編集委員会の責任において一応の吟味をする。欧文に明らかな誤りがある場合には、原意を損なわない範囲で調整することがある。

(2)欧文抄録の作成にあたっては、特に次の点に留意すること

①日本国内で知られている固有名詞でも、海外の読者に知られていないようなものについては、簡単な説明を加えること。

②段落の初めは5字分あけ、句読点としてのコンマ(,)およびピリオド(.)の後は1文字あけること。

③省略記号としてのピリオド(.)の後はあけないこと。

4) 本文

ひらがな現代かな遣いとし、当用漢字を使用する。外国語の訳語はカタカナを用いる。詳細は、「5.本文の体裁」を参照する。なお、内容は十分に推敲し、簡潔で、わかりやすいように記述する。

5) 図(写真を含む)表

原稿は、本誌に直接印刷できるように、文字や数字を鮮明に書く。原則として白黒印刷とし、カラー印刷を必要とする場合は筆者が実費負担とする。原稿 1 枚に図表 1 式を使用し、通し番号とタイトルを記し、本文とは別に番号別に一括する。本文中への挿入箇所は、本文中にそれぞれの番号を明記する。

図題、表題、それらの見出しや説明文、注は欧文抄録の理解を助けるために、できるだけ欧文とすることが望ましいが、同一論文で和文と欧文の併用はさけること。

なお、図表の注記は、各図表の下に記入し、符号は、上付ダガー(†, ††, †††)を用いる。なお、統計学上の有意水準を示す場合のみアスタリスク(*, **, ***)を用いる。

5. 本文の体裁

1) 記号, 符号, 単位, 略語

次のような符号を用いることができる。

① 読点

句点(終止符)はピリオド(.), 読点(語句の切れ目)はコンマ(,)を用いる。

② 中黒丸(・)

密接に関係して一体となる文字や語句などを結ぶ際に中黒丸(・)を用いる

③ ハイフン(「-」)

対語や対句の連結, 合成語, ページの表記に用い, 半角とする。

④ ダッシュ(「—」)

1 字分のダッシュは期間や区間を示すのに用いる。2 字分のダッシュは注釈的な説明をするのに用いる。「〜」は原則として用いない。

⑤ 引用符

和文の場合には「 」, 欧文の場合には“ ”を用いる。

⑥ 省略符

引用文の一部あるいは前後を省略する際, 3 点リーダー(「…」)を用いる。

⑦ 数字

原則として, アラビア数字を用いる。

⑧ 単位

原則として, 国際単位系(SI 単位系)とする。

⑨ 略語

論文中において高い頻度で使用される用語に対して, 著者が便宜的に省略した語を用いる場合は, 初出時に略さずに明記し, (以下「…」と略す)と添え書きをしてから, 以後その略語を用いるようにする。

2) 章立て

原則として, 下記の通りとし, それぞれ見出し語を付ける。

I. II. III. … → 1. 2. 3. … →1)2)3)… →(1)(2)(3)… →①②③…

3)注記

注記をつける場合、文中の当該箇所に「注 1」「注 2」のように上付文字を用いて連番号をつけ、本文と文献との間に、一括して番号順に記載する。なお、見出し語は「注記」とする。なお、注記は本文あるいは図表で説明するのが難しく、明らかに必要なときだけに用いる。

4)特殊字体

(1)ゴシック

ゴシックは見出し語のみに使用し、2重アンダーラインを用いて指定すること。本文中の特定語句を強調するためのゴシック体の使用は避けること。

(2)イタリック

次の場合にはアンダーラインを用いてイタリック体を指定することができます。

①数式中の数

②数値や量

③統計法に用いられる記号

④動物・植物の学名

本文中の欧語を強調するためにイタリック体を使用することは、引用の場合などを除いて原則しないこと。

(3)アンダーライン

その他に文意を強調するためのアンダーラインは原則として使用しないこと。

6. 本文中での文献引用の仕方

論文中で文献を引用する場合には、基本的な文献を厳選し、正確に引用する。なお、本文中の記載は、原則として、「著者・出版年方式(author-date method)」とする。なお、引用した文献は、すべて文献リストに掲載する。

1)語句や文章を引用する場合、和文ならば「 」, 欧文ならば“ ”でくくる。著者が2名の場合、和文ならば「著者名1・著者名2, 出版年)」とし、欧文の文献を引用する場合も「Author, 出版年)」、「Author 1 and Author 2, 出版年)」、「Author et al., 出版年)」等とする。

〈例〉 ① ・「・・・」(小山・澤村, 1998)という考えは・・・

② ・“……” (Folkman and Lazarus, 1988)の視点・・・

③ ・「・・・」(澤野ほか, 2008)の結論は、・・・

2)同じ論文や文献を2回以上引用する場合には、文献表にはページ数を記入しないで、本文中に著者とページ数を()をつけて記入する。

〈例〉 ④ ・「・・・」(関根・篠崎, 2005, p18)という仮説は・・・

⑤ “……” (Cross, 1998, pp.23-30)という主張には・・・

3)本文中で参照した文献を明記する場合には、次のような形で著者名と発行年を記入する。同一著者の文献が複数ある場合には、括弧内の発行年をコンマ(,)でつなぐこと。同一著者の同一年に発行された複数の論文は発行年の後に a, b, c, ……をつけて区別する。

- <例> ⑥佐藤(2008)によれば・・・
 ⑦篠崎(1996, 2000)による一連の研究では・・・
 ⑧竹田・恩田(2005)によれば
 ⑨Folkman and Lazarus(1988)および Lyle(1988)の見解は・・・
 ⑩Brewer et al. (1991)によれば・・・
 ⑪Coleman(1990, 1993a, 1993b)の一連の研究では・・・

4) 翻訳書の著書を表記するときは、カタカナ表記とする。

- <例> ⑫コリンズ(1989)は・・・このコリンズの考え・・・

5) 翻訳書と原著の両方を引用したときには、翻訳書は上記(5)に従って記入すること。原著は欧文表記とする。

- <例> ⑬ジョンソン(1970)によれば・・・しかしながら、Johnson(1978)の・・・

7. 文献リストの執筆要領

1) 文献リストの概要

文献リストの見出し語は「文献」とする。リストへの記載順序は、筆頭著者の ABC 順、同一著者の場合は発表年順とし、書誌データには通常、著者名・発行年・題目(書名)・誌名・出版社・ページなどの情報が含まれる。書式は下記の例に従うこと。

2) 定期刊行物(雑誌)の掲載方法

(1) 一般的な形式

原則として、以下のように記載する。記載形式は、著者氏名<性と名の順に全員を記す>、西暦年号<()でくくり、同年発表が複数の場合は、a, b, c・・・で区別する>、論文題目<.(ピリオド)の区切り>、雑誌名、巻数<号数 n は(n)と連記し:(コロン)で区切り、ページ数(ハイフンで範囲を表記)>とする。著者名は、共著の場合、和文の場合には中黒丸(・)、英文の場合には“and”で続ける。ただし、欧文で3人以上の共著者の場合にはコンマ(,)でつなぎ、最後の著者の前だけに“and”を入れる。

<記入例>

- ① 遠藤幸雄・早田卓次(1977)跳馬技に関する一考察. 桜門体育学研究, 12 : 1-8.
 ② Malouff, J. M., Schutte, N. S., and McClelland, T. (1992) Examination of the relationship between irrational beliefs and state anxiety. Personality and Individual Differences, 13(4) : 451-456.

(2) 同一著者の同発行年の複数の論文を引用した場合

発行年の後に“a, b, c, …”をつける。なお、論文名は、欧文の場合、題目の最初の文字だけを大文字にする。誌名は、原則として、正式名称を記述する。省略する場合は、その雑誌に指定された略記法、または広く慣用的に用いられている略記法に従う。

<記入例>

- ③ 坂入洋右・征矢英昭(2003a)新しい感性指標：運動時の気分測定. 体育の科学, 53(11) : 845-850.
 ④ 坂入洋右・徳田英次・川原正人・谷木龍男・征矢英昭(2003b)心理的覚醒度・快適度を測定する二次元気分尺度の開発. 筑波大学体育科学系紀要, 26 : 27-36.

⑤ Lazarus, R. S. (1993a)Coping theory and research : past, present, and future. *Psychosomatic Medicine*, 55(3) : 234-247.

⑥ Lazarus, R. S. (1993b)From psychological stress to the emotions : a history of changing outlooks. *Annual Review of Psychology*, 44 : 1-21.

3)単行本の場合

書き方の原則は定期刊行物の項に従うこと。同じ文献を 2 回以上引用する場合には、文献リストにはページ数を記入せず、本文中に引用ページを明記すること。

(1)単行本全体の場合

著者名, 発行年<()でくくり>, 書名(版数, ただし初版は省略)<(ピリオド)の区切り>, 発行所<:(コロン)の区切り>, 発行地<(ピリオド)の区切り>, 引用頁<p または pp>, の順で記す。なお, 引用箇所が限定できない場合には, ページは省略します。また, 編集(監修)書の場合には, 編, 監, あるいは編著と表記します。英文では編集者が 1 人の場合は(Ed.), 複数の場合は(Eds.)をつける。

<記入例>

⑦ Buckworth, J. and Dishman, R. K. (2002)Foundations of Exercise Psychology. *Exercise Psychology*(2nd ed.). Human Kinetics : Champaign, pp. 3-15.

⑧ 保健体育科学研究会編(1999)保健体育教程(新訂版). 技術書院 : 東京, pp. 35-44.

⑨ 金子明友(2007)動感言語の体系論を問う. 身体知の構造 構造分析論講義. 明和出版 : 東京, pp136-156.

⑩ Segrave, J. O. and Becker, B. J. (Eds.)(1985)Sport and higher education. *Human Kinetics : Champaign*.

(2)単行本の一部の場合

論文(章)著者, 論文(章)の題名の後に編集(監修)者名と「編」, 「監修」, 「編者」などをつける。英文の場合には, “In :” をつけた後, 編集(監修)者名と(Ed.), または(Eds.)をつける。

<記入例>

⑪ 狩野豊(2007)持久力をつくるトレーニング. 長澤純一編 体力とはなにか-運動処方その前に-. ナップ社 : 東京, pp.207-214.

⑫ Becker, B. J. (1985)Sport and higher education. In : Harris, J. C. and Park, R. J. (Eds.)The closing of the American mind. *Human Kinetics : Champaign*, pp.233-256.

(3)翻訳書の場合

原著者の姓をカタカナ表記し, その後ろにコロン(:)をつけて訳者の姓名を記入する。共訳の場合は中黒で, 訳者が 3 人以上の場合は「:・・・ほか訳」と省略して筆頭訳者だけ記入する。欧文の翻訳書の場合, 原著の書誌データは執筆者が必要と判断した場合に最後に< >内に付記する。

<記入例>

⑬ メール : 川井昂ほか訳(2008)コーチと選手のためのコーチング戦略. 八千代出版 : 東京, pp67-87. <Maile, A. (2002)The coaching process -principles and practice

for sport-. Elsevier Limited : Oxford.)

8. 謝辞・付記

謝辞や付記は本文とは別け，それぞれ「謝辞」「付記」の見出し語を用いて記述する。